

第12回 名取川水系河川整備学識者懇談会 議事概要

開催日時：平成29年11月13日（月）

9：30～12：00

開催場所：（現地視察）名取川右岸 閑上地区

（会 議）仙台河川国道事務所 大会議室

（発言者）●：委員、○事務局

- 水辺整備の事業効果について、利用者数が1.7倍になったとのことだが、対象とする学校が沿川の学校に限定されているのではないかと。総合学習等の授業時間の中で活用するためには移動時間がかかると大変である。例えば、マイクロバス等の手配をすれば学校としては運用しやすいと思う。策川上流の溪流や広瀬川へ導水する水路に関連する小中学校も学習できると思う。そのような学校も対象として働きかけるともっと理解が高まり、更に利用者が増えると思う。
- 八木山中学校の方を官用車で送迎した事例もある。より利用が促進されるよう検討していきたい。
- 環境整備事業の費用便益比の計算について、今回の評価手法はCVMとなっているが、アンケート調査の支払意思額の上限額を3,000円としており、そこから8段階の金額設定としていることから、過大評価とはならない適切な評価だと思う。よって事業継続は妥当だと思う。
- 河川整備計画の進捗状況について、進捗状況を示している河川整備計画メニュー4項目の最大が65%であるのに、総事業費の割合が66%となっている。おそらく、震災後に材料費や人件費が高くなっているものと思うが、最終的には総事業費が高くなるものと認識して良いか。
- 材料費や人件費が高くなっていることにより、総事業費が増えているのは事実かと思う。一方で、コスト削減の取り組みも行っているため、事業費を抑える工夫も行いながら進めているということで理解いただきたい。
- 過去の水辺整備の効果に関して、河川空間利用実態調査の結果から利用者が1.7倍に増えているとのことであるが河川事業だけで1.7倍となったのでは無いと思う。例えば、野球場の利用者や堤防のジョギングの利用者、運動ブーム等の影響もある。空間利用実態調査の結果は、単純に河川事業の効果とは言えないので、慎重に扱うべきだと思う。
閑上地区かわまちづくりのCVMによる費用便益比算出についても何処まで信用できるのか疑問も持っている。事業後に人が訪問することを想定した質問票になっているが、実際にやってみなくてはわからない部分もあり、成功の見込みなど、シナリオをきちんと伝えていかないと信頼できる結果にはならないと思う。

東日本大震災後の閑上地区の復興に対して、国全体として協力していく中で、本事業の必要性自体

を否定するものではなく、むしろ行っていくべきだとは思いますが、CVMによる費用便益比が70を超えたことを根拠として事業の必要性を主張して良いかは疑問に思う。

- 補足であるが、全体事業の費用便益比の数値が上がっている理由として、TCMからCVMに変更された影響もあるが、前回再評価の平成26年では現地展開前の状況であったことに対して、今回は平成27年～平成29年に現場で展開されている状況が見えてきて事業への理解が図られたこともあり、CVMのアンケート調査に反映された結果、数値が上がったものと考えている。
- 水辺の楽校について確認だが、決められた日に集まる場所なのか、通常開放されている場所なのか、普通の日には家族連れで行って学べるような場所となっているのか確認したい。また、水辺のそばに、河川に生息する生物等の案内はあるのか。普通の日に来て、川で遊んで生物を学ぶことができるような表示等があると良いと思う。
- 総合学習の取り組みとしては、学校のカリキュラムにあわせてやっている。八本松マンション前の整備箇所はじゃぶじゃぶ池もあり通常でも遊べる状態になっている。
また、案内看板は設置していないが、川の生物が載っている下敷き等を作成して学校に配っている。今後検討していきたい。
- 今日、河口部を視察して、右岸の閑上側は水辺に親しむ空間、あるいは観光の視点として整備されていることが実感できた。一方、対岸の仙台市側はヨシ原が広がりすばらしい自然環境が残されていると思った。また、移動中の車窓から見ても、名取川や広瀬川の河川敷には自然が多くあるイメージを持った。
多様な自然を残していくことについては、多くの皆さんが工夫を重ねてこられたのだと思うが、河口部や流域を見渡して、自然度の高い場所を積極的に残すストラテジーがあれば教えて欲しい。
- 震災前の井土浦の汽水域は貴重な環境であったが震災の津波により被害を受けた。その後の保全方法については、仙台市と調整し、井土浦の環境を極力元の形に近い状態となるよう配慮しながら整備を進めている状態である。井土浦の昆虫類等については震災後壊滅的であったが、種によっては戻りつつある状況にある。
一方、閑上側は、従来から港町として人々を中心とした生活の場であったことから、河川堤防と地域の生活を一体的に整備している。右岸側と左岸側で対照的であるが、地元自治体と河川管理者との調整の結果であり、自然環境も住環境もどちらも徐々に戻りつつある。
- 河口域はサケやアユ、イシガレイ等の魚類や、アサリやシジミの二枚貝など、水の中の生き物が豊かな所であるため、閑上地区のかわまちづくりにこれを活かして欲しいと考えている。現在の計画では水辺に近づいて豊かな時間を過ごすことを考えており、水の中の生物を活かした取り組みまでは考えていないということであるが、閑上大橋の近くでは砂地が広がり、チゴガニやシジミが生息しているなど豊かな自然に親しむことができるので、そういうことも視野に入れてミズベリングやかわまちづくりに活かして欲しい。

- 閑上地区の海岸について、コアジサシやシロチドリ等の生息・繁殖地だった。震災後の工事関係により人の立ち入りが規制されてきたが、工事が終わった後にこの一連がコアジサシやシロチドリ等の繁殖の場所として活用されて欲しいと思っている。

名取市ではここで自然観察会を開催していたが、震災後は工事のため中止となっている。整備後にはまた活用して欲しい。河川敷や海岸の砂浜がどうしてこういう形になったのか、自然環境・生態系の成り立ち等について学習に活かして欲しい。

工事が完了するとある程度環境が安定するので、震災による環境の変化についての説明をコミュニティの広報誌等でお知らせできたら良いと思う。
- 石巻のかわまちづくりに関わったが、河川の整備とまちづくり、小学生が水辺に親しんで学習できるような取り組みなど、時間をかけて地元の方とワークショップを開きながら、良い形で出来つつあると感じている。閑上でもまちづくりと連動して色々な事に取り組む段階になると思う。生態系や生物との繋がり等も事業の進展の中で配慮して頂けるものと期待する。

以前、舟運が災害時の物流のバックアップにもなり得るとして事業を行ったと記憶しているが、その点について現在はどのように考えているのか。
- 舟運については名取市が主体となって行っているが、観光的な位置づけであり、今のところ災害時の活用としての位置付けは無い。
- 舟運は観光事業となっているとのことだが、仙台空港と閑上は、昔は日常生活の舟運の場であった。南貞山堀から閑上地区や蒲生地区まで資材・食料を運び、伊達藩の時は広瀬川も上ったとの話もある。

昔は堤防沿いに松並木があったが、これを観光の要所としてこれから使うのであれば、広浦から閑上水門近くの船着場まで活用してもらおうと良いと思う。

また、井土浦の生態系をじっくり見るような観光の要所にしても良いと思う。そうすれば、井土浦もしっかりと改善され、仙台・名取の連携もうまくいくと思う。
- 宮城県で来年、全国的規模の運河シンポジウムを開催すると聞いており、それによって盛り上がってくればよいと思う。

—以上—